

夜の旅と昇天 (6/6) :

:

明:

この大なる奇と誉は、不信仰者たちにとってイスラームを叩く好の会となり、またムスリムたちの信仰をすものともなります。

目:[事イスラームの真性を示す数々のムハンマドの言者性に](#)する

目:[事言者ムハンマド彼の言者性の](#)

より: ア イシャ ステイスィ

日16 Jul 2012

集日 16 Jul 2012

言者ムハンマドは、アル=ブラクに跨ってエルサレムの最もキマスジドまでび立ちました。彼は昇天して七天を超え、想像もつかないような奇を体しました。彼は言者とを合わせて挨拶を交わし、ついには神の御前に立ったのです。同じ夜、旅立ちからか数には、彼はマッカにいました。

この奇の旅は、言者ムハンマドのにとって、彼とその追者たちにする格好の武器となり、同に信仰者たちの信仰をすとなりました。彼はすると、ウナム アイマンのもとへ向かい、奇の旅について述べました。彼女の反はこうでした。「神の使徒よ、このことはにも言ってはなりません。」ウナム アイマンの言者ムハンマドへの信は完全なものだったため、彼女はこの旅について信じましたが、他の人々がどう反するかを恐れたのです。

言者ムハンマドはウナム アイマンについて、「私の母のような存在」であると述べています。彼女は彼の母アミナの忠な女中で、彼女の死も彼と留まりました。言者ムハンマドとウナム アイマンは常に意にしており、この奇の旅の、彼はおそらく安息を求

めてウナム アイマンの家を れ、一 の奇 について、そして次の きについて考えていたのです。

言者ムハンマドは、奇 の夜について人々に打ち明けることを 心しました。彼はその反 や がどうなろうと、神のメッセ ジを人々に える 任を感じていました。彼の神への信 は 不 のものでした。彼は かに家を出て、 マスジドへ向かいました。その途中、彼は何人かと出会い、夜の旅についての知らせが人々の に まって行きました。

反

言者ムハンマドがマスジドで静かに座っていると、アブ ジャハルが近づいてきて、 着にこう 言いました。「ムハンマドよ、何か新しいことはないか？」イスラ ムの最大の の一人と られていたアブ ジャハルは、イスラ ム初期におけるムスリムたちへの拷 、虐待、 人、嫌がらせの数々を行なってきた 本人でした。言者ムハンマドはアブ ジャハルによる 意と憎 について承知していましたが、彼は正直にこう言いました。「昨夜、私はエルサレムへと旅をし、 ってきたところだ。」

笑いを堪え切れなかったアブ ジャハルは、マッカの人々の前で同じことを言うよう求めました。言者ムハンマドがそれに じると、アブ ジャハルは け足でマスジドを び出し、走りながら道端の人々に呼びかけていきました。マスジドに十分な数の人々が集まってくると、アブ ジャハルに促され、言者ムハンマドは皆に こえるようこう言いました。「私はエルサレムへ行 っ ってきた。」

人々の群 は笑い出し、口笛を吹き、手を叩き合わせました。彼らはそれを壮大な冗 だと捉え、地面を笑い げたのです。これはアブ ジャハルのもくろみ通りに行き、彼をわくわくさせました。不信仰者の群 はイスラ ムに止めを刺すことが出来る 会だと思ったのです。彼らは 言者ムハンマドの主 に嘲笑し、 しました。群 の中にはエルサレムへと旅行したことがある者がい

たため、彼らは 言者ムハンマドが たものを 明するよう求めました。

言者は彼の旅について 明を始めましたが、それは彼を苛立たせました。彼がエルサレムで ごした は かで、奇 の旅そのもの以外のことは かな しか えていなかったからです。しかしながら、言者ムハンマドは神が「彼の目の前」に を示し、彼が た「石から石、レンガからレンガ」について 明しました。エルサレムに旅した者たちは彼の った が正であると 言したのです。（サヒ フ ブハ リ ）

また他の 承によれば、彼がマッカへと ってくる 、 言者ムハンマドはキャラバンの上を 通り越したと述べています。彼はそれについての を明 に述べました。キャラバンはラクダを 失っていたため、言者ムハンマドは空からラクダがどこに居るかを彼らに告げたのです。彼はまた、彼らの水を んでいます。

マッカの人々はそのキャラバンが ってくる前に、直ちに昨夜の出来事について ねる使者を遣わしました。彼らは、ラクダの居 所を告げる奇妙な声が こえてきたこと、そしてその にあった水が消えたことを しました。しかしこれらの 言さえも人々にとっては 事足りないものでした。彼らは 言者の言 を信じず、愚弄し嘲笑したのです。この奇 の旅は、一部の新ムスリムでさえ不信仰に り、イスラ ム信仰から背き去ることになる だったのです。

信仰の甘美さ

く、真の信仰を持つ人々にとっては、神の御力は明らかでした。その のすべてを信じいと受け取った人々は、言者ムハンマドの最も良き友であり支持者でもあるアブ バクルのもとを れました。彼らは 言者ムハンマドのエルサレムへの一夜にしての旅について彼が信じているかどうかを ねました。アブ バクルは 躊躇することなく、こう断言しました。「神の使徒がそう言ったのであれば、それは事 だ。」この出来事から、アブ バクルは「アッ スィッディ ク（信仰者のさきがけ）」という敬称を得たのです。このことは、不信仰者たちによる身体的拷 や虐待を受け、さらにはこうした想像もつかないような概念を提示され、それを受け入れなければならなかったムスリムたちにとって

の 点でした。彼らの一部は失 者となりましたが、多くは新たなる高みに到 し、唯一なる神への真の服 による信仰の甘美さを味わうことができたのです。

マッカの マスジドからエルサレムの最も きマスジドまでの一夜にしての旅と、 天における昇天から全能なる神の御前に立ったことは、最 の 言者であるムハンマド（神の慈悲と祝福あれ）以外のいかなる人 もそれまで授けられたことのなかった奇 、そして大いなる 誉だったのです。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/index.php/jp/articles/1548>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。